

## 研究主題「我が国や郷土の音楽のよさに気付き表現できる音楽学習

### —和太鼓を活用した学習を通して—

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課  
板橋区立桜川小学校 主任教諭 清水 綾子

#### 第1 研究のねらい

中央教育審議会答申（平成28年12月21日）では、「グローバル化する社会の中で、子供たちには、芸術を学ぶことを通じて感性を育み、日本文化を理解して継承したり、異文化を理解し多様な人々と協働したりできるようになることが求められている。このため、音楽に関する伝統や文化を尊重し、実感的な理解を深めていくことが重要である。」と示された。また、小学校音楽科の基本的な考え方として、我が国や郷土の音楽に親しみ、よさを一層味わうことができるよう、和楽器を含む我が国や郷土の音楽の学習の更なる充実を図ることが示された。

これらの考えに迫るために、第3学年において、多くの児童が祭りや盆踊りを見たり聴いたりした経験がある和太鼓を取り入れ、児童が感性を働かせる学習について研究を行う。本研究で感性を働かせる学習とは、音色、リズム、速度、強弱、反復などの音楽を形づくっている要素を手掛りに音楽のよさや面白さ、美しさを感じ取ることと捉えた。

地域の協力者である外部講師（以下、外部講師）による和太鼓演奏の鑑賞と、音楽づくりを伴った演奏体験を複数回行う学習をすることで、児童は我が国や郷土の音楽が、自分たちの生活に身近にあることに気付くとともに、そのよさを音楽や言葉で表現できるようになると考え、本主題を設定した。

#### 第2 研究仮説

日常生活やこれまでの学習で育まれてきた感性を働かせ、和太鼓の演奏を聴き、音色の素晴らしさに触れさせるとともに、自ら和太鼓を演奏し友達と音楽づくりをする学習を通して、児童は我が国や郷土の音楽のよさに気付き表現できるであろう。

#### 第3 研究の内容と方法

##### 1 基礎研究

###### 我が国や郷土の音楽のよさに気付き表現できる児童について

世界にはそれぞれの国で大切にしている伝統的な音楽やそのよさがあり、我が国の音楽と共通している部分もある。そのことを踏まえ、小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編や先行文献より、我が国や郷土の音楽のよさを次のようにまとめた。

- ・人々の生活や文化との関わり
- ・季節や自然などの風情や美しさを感じ取り、いとおしんできた日本人の感性
- ・我が国の伝統的な音階に基づいた音感覚
- ・雅楽や長唄、和楽器など音楽の細かい表現を伝えるための口唱歌くちしょうが

我が国や郷土の音楽のよさに気付き表現できる児童とは、自らの感性を働かせて、音楽がもつよさを音楽や自らの言葉で表現できるようになることであるとした。そのよさに気付き表現できるようにするためには、低学年から高学年へと、わらべうたや和楽器等、段階を踏んで学習を行うことが大切である。また、先行文献より和太鼓のよさを次のようにまとめた。

- ・イメージした音を出しやすい楽器
- ・全身で感じられる音の響き
- ・息を合わせて演奏するための間や掛け声の活用

## 2 調査研究

平成30年7月に都内公立小学校の42校の音楽専科42人と昨年度までに中学年の音楽を指導した経験のある学級担任14人、そして都内公立小学校1校の第3学年児童110人を対象に、我が国や郷土の音楽に関わる調査を4件法で実施した。

教員から見た児童の実態調査では、鑑賞について「曲想と楽曲の構造との関わりを意識して自分の言葉で表すこと」では、62.5%の児童に課題があることが分かった。また、音楽づくりについて「自分の考えを発表したり友達と話し合ったりすること」では、44.7%の児童に課題があることが分かった。

児童に対する調査では、鑑賞について「音楽の特徴に気付きはしているが、自分の言葉で表すこと」では44.6%の児童が苦手意識をもっていると回答した。また、「友達と音楽をつくる時、自分の思いを友達に伝えること」では36.4%の児童が苦手意識をもっていると回答した。

以上の調査結果から、感じ取った音楽のよさや自分の思いを伝えられる場面を意図的に設定できるような工夫が必要であると考えた。

## 3 開発研究

研究主題に迫るために、以下の三つの手だてを用いた題材開発を行った。

### (1) 外部講師による和太鼓演奏の鑑賞と演奏体験の充実

感性を働かせ表現するための工夫として、鑑賞や演奏体験の充実を図る題材指導計画を作成した(表1)。

第一次では、外部講師の演奏で感じた音をすぐに児童が音で表現できるように工夫した。また、演奏を継承する人の思いに触れられるようにした。

第二次では、児童が音楽づくりで楽器を演奏して、思いや意

図をもって表現できるように、各班に和太鼓を一張ずつ用意することで演奏時間を確保した。そして、題材の最後には学習の成果が表れるように、共通事項を意識して鑑賞を行わせるようにした。

### (2) 口唱歌を基にしたリズム譜の活用

口唱歌は我が国の伝統的な音楽を伝承するための手法の一つである。和太鼓の外部講師と調整をして、学習で活用する4種類のリズム譜を色分けして作成した(図1)。リズム譜を読むことが苦手な児童も、口唱歌を活用することで自然とリズム感が身に付き、自信をもって和太鼓を打ったり強弱の工夫をして音楽づくりをしたりすることができると考えた。これらの活動を通して児童の感性が働くようにした。

表1 題材指導計画

	第1時	第2時	第3時	第4時	第5時
次	第一次		第二次		
学習内容①	鑑賞1 「東京音頭」	鑑賞2 「三宅太鼓」	体験③ 個人で音楽づくり	体験④ 班で、「東京音頭」に合わせて音楽づくり	体験⑤ 発表、相互評価
学習内容②	体験① 和太鼓でいい音探し(手、足、腰の使い方の工夫)	体験② 4種類の口唱歌のリズム模倣とリズムリレー	班内で練習と発表、相互評価	班内で交代しながら和太鼓を使い演奏練習	鑑賞3 「八木節」
共通事項	音色、旋律、リズム、反復	音色、強弱、リズム、反復、呼びかけとこたえ	リズム、強弱、反復	リズム、強弱、反復	リズム、強弱、反復、音色、拍
その他	間、掛け声	間、掛け声	間、掛け声	間、掛け声、手の動き	間、掛け声、手の動き

※4分の4拍子	
ドン ドン ドン ドン	ドン ドン ドン ●
ドッコ ドッコ ドッコ ドッコ	ドッコ ドッコ ドン ●
ドン ドコ ドン ドコ	ドン ドコ ドン ●
ドドン ガドン ●	ドドン ガドン ●

図1 口唱歌を基にしたリズム譜

### (3) 学習記録の工夫

児童が自分の考えを伝えられるようになるために、「たいこマスターへの道」というワークシートを作成した。毎時間のめあてを確認でき、授業の終わりには、自己評価や他者との関わりから自己の考えを深め、振り返りができるワークシートである。

鑑賞の学習では、児童が感性を働かせて自分の考えを明確にするために、楽曲を比較して記述できるようにした。また、演奏体験では、太鼓を打つときには常に構え方を意識するためのポイントを振り返ることができるようにした。

個人での音楽づくりについての学習では、図2のワークシート集を活用して、児童が自分の思いや意図をもって音楽づくりをしやすいうように、色分けされた口唱歌で表されたリズム・パターンを【つくってみよう】に貼り付けられるように工夫した。そして、班での音楽づくりでは、個人のワークシートを拡大したものを使用して学びを共有できるようにした。

また、教員向けには、児童を評価する際に資料として活用できるように作成した。そして、ワークシートをそのまま拡大コピーすることで、掲示資料としても利用できるようにした。

## 4 検証授業

都内公立小学校第3学年3学級の児童110人を対象に、平成30年9月及び10月に、全5時間、題材名「日本の音楽に親しもう」で検証授業を実施した。

### (1) 外部講師による和太鼓演奏の鑑賞と演奏体験の充実について

鑑賞「東京音頭」での児童の感想では、「旋律だけだと暗い感じがしたが、和太鼓は音楽をにぎやかにする役割があると分かった。」という発言があった。鑑賞「三宅太鼓」では、「掛け声が入ることで太鼓の音が力強くなり、どんどん楽しくなった。」という発言があり、間近での鑑賞を通し、音色のよさに興味・関心をもって聴いている様子が見られた。また、演奏体験では、第1時で「楽しかった。」という発言だけだった児童が、第4時で「同じリズムの繰り返しを使って音楽づくりをしても、強弱の工夫によって音楽の雰囲気が変わる。」という発言になった。鑑賞と演奏体験を複数回行うことによって、感じ取ったことを活用し、感性を働かせて音楽を聴いたり音楽づくりをしたりする様子が見られるようになった。

そして、演奏を継承する外部講師の思いに触れたことで、児童が楽器についてより知りたいという思いや、より上達したいという思いを記述した。さらに、題材のまとめでは、「和太鼓の学習をして楽しかったので、近所の公園である祭りで、もう一度見たり聴いたりしてみたい。」「全国各地の祭りの音楽を聴いてみたい。」という記述や発言もあり、外部講師による和太鼓演奏の鑑賞や演奏体験の充実は、児童が我が国や郷土の音楽のよさに気付き表現することにつながったと考えられる。

図2 ワークシート（一部抜粋）

## (2) 口唱歌を基にしたリズム譜の活用について

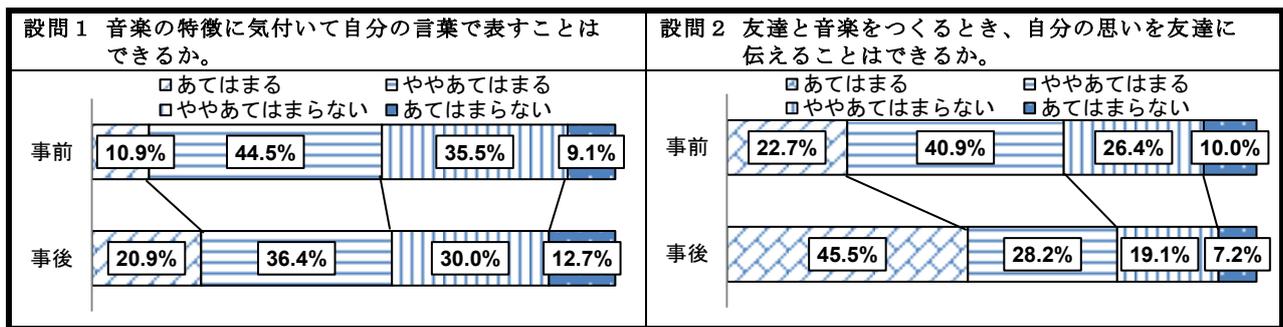
口唱歌を活用することで、リズム・パターンを覚えやすくするだけではなく、児童自ら口ずさみながら音楽づくりをしたり、班ごとに声の大きさを工夫しながら太鼓を打ったりする様子が見られた。これらの児童の姿から、口唱歌は自然とリズム感を身に付けられ、楽器の音色や音楽を児童が感じ取って演奏するために有効であることが考えられる。また、口唱歌は和楽器がなくてもできることから、どの教員でも指導しやすい方法である。

## (3) 学習記録について

学習記録を工夫したことにより、児童は毎時間のめあてを意識することができた。そして、友達との学び合いを通して、振り返りを記述していくことで、自分の思いを明確にすることができた。特に、音楽の学習に苦手意識があり、事前調査でも否定的な回答の多かった児童は、事後調査では肯定的な回答が増えた。さらに、児童の毎時間の振り返りには、間近で聴いた和太鼓の音に迫力があることや、演奏の体験をして打ち方によって音の響きが変化すること等、感性を働かせていると考えられる記述が見られた。

## (4) 意識調査における児童の変容について

検証授業後に調査を実施し、児童の変容を見た。結果は次のとおりである。



三つの手だてを用いたことにより、肯定的な割合が高くなっている。しかし、設問1では、事前調査に比べ、「あてはまらない」が3.6ポイント増加している。

事後調査で否定的な回答に変わった全ての児童に話を聞いたところ、「間違えたリズムを和太鼓で打っていることに気付き、リズムの特徴を意識して音楽を聴いて打っていないことが分かった。」と述べている。音楽の特徴には気付き、説明することができていることから、自己の学習への評価が厳しくなった結果であると考えられる。

## 第4 研究の成果

我が国や郷土の音楽のよさに気付き表現することができる児童を育成するためには、感性を働かせて和太鼓演奏の鑑賞や演奏体験をしたり、口唱歌を基にしたリズム譜の活用をし、音楽づくりをして楽器で表現したりすることが大切である。和太鼓に関心のなかった児童が、第1時の鑑賞での曲想を基に、第5時の演奏発表で、「元気でにぎやかな盆踊りをイメージして演奏する。」と、班の思いを伝えて演奏できた。題材のまとめで、「日本の様々な季節の祭りの音楽も聴いてみたい。」と発言する児童もおり、よさに気付き表現できる児童の育成につながった。

## 第5 今後の課題

我が国や郷土の音楽のよさに気付いたことを、児童が保護者や地域の人に主体的に発信できる場の工夫をする。また、箏や尺八など他の和楽器への汎用性についても検証し、中学年から高学年へと系統性をもたせながら継続してカリキュラム開発を行っていく。